

伝統技法を活用した新製品開発

水野 潤^{*1}、生浦京子^{*1}

Design of Ceramicware by Traditional Art

Jun MIZUNO^{*1} and Kyouko IKUURA^{*1}

Tokoname Ceramic Research Center, AITEC^{*1}

日本六古窯の一つである常滑に、古来より伝わった陶磁器製造の優れた技法についてビデオ映像による技術資料を作成し、伝統を新たな視点で見直すことにより、陶製湯口や中部国際空港内専門店等で販売する新商品を開発した。新商品開発はとこなめ焼協同組合傘下の企業により組織した研究会によって行い、名古屋市内デパート、中部国際空港内専門店にて成果品の展示発表会を開催した。

1. はじめに

市場の高度な成熟化による需要の伸び悩みや産地間競争の激化、経済のグローバル化による安価な海外製品の流入等、常滑の陶磁器製造業にとっては、非常に厳しい経営状態が続いている。幸い2005年、中部国際空港の開港により、常滑の知名度の向上と来訪者の増加が期待でき、活路を見いだしている。日本六古窯の一つである常滑は古来より陶磁器製造の優れた技法が受け継がれ、今日の産品に生かされている。素材の流通や情報の均質化によって産地の特徴が失われつつある今日、このような伝統を改めて見直し、アピールすることが重要との考えから、常滑焼の伝統技法の調査・記録を行い、これらの技術資料を活用して新商品開発を行った。

2. 伝統技法の調査・記録

常滑焼らしさを産品に生かすため、常滑らしさを形成する技法の調査と記録を行った。16年度は「茶器編」として茶器制作の技法について実施した¹⁾が、本年度は「大物・陶彫編」として常滑焼の得意とする大物成形技術と繊細な粘土ワークの陶彫技法について調査した。

各実演者による制作過程を収録したビデオを編集し、ナレーション、タイトル、エンドロールを加えて約1時間45分にまとめた。完成したビデオはDVDとVHSテープに保存し、開発研究の資料とする他常滑市商工観光課や図書館などの県内関係機関に配布し、一般に貸し出すことにより、常滑焼に対する理解を深めてもらう教材として提供した。調査を行った技法は次のとおりである。(写真1)

2.1 ヨリコづくり

常滑では中世より大甕の製造が盛んであった。ヨリコ

づくりはヒモづくりの1種であるが、直径8センチはある太いひも状の粘土、ヨリコを制作器物を中心に回りながら積み上げる技法である。昭和の終わり頃から次第に使われなくなった技法であるが、中部国際空港建設に伴い、大型プランターの注文があったのを機会に復活した。このヨリコ作りの技法を生かして陶製風呂桶を制作した過程を記録した。

実演者：前川賢吾氏 = 賢山窯、常滑焼伝統工芸士

2.2 型押成形

型押しで成形する型には木型、石膏型、土型などがある。石膏型は制作も簡単な上、細かな表現もできるので現在でも一般によく使用されている。型押成形は石膏型の内面にタタラを密着させた後、細いヨリコで口縁部を形作っていく。やはり常滑の代表的な産品である盆栽鉢の製造工程を収録した。

実演者：片岡貞光氏 = 小松泉、常滑焼伝統工芸士

2.3 ロクロ成形

常滑ではヨリコづくりが盛んであったので、ロクロ成形が普及するのは以外に新しく、江戸末期であると言われている²⁾。効率よく成形できるので作られる産品も茶器、食器、花器など多岐に及んでいる。今回記録したのはロクロによる花器の制作工程であるが、ロクロ成形後に手を加え、断面形状を四角形や楕円形にしたものである。さらに付加価値を高めるため、ローラーによる加飾を施している。

実演者：中野濬介氏 = 中野陶園

2.4 型挽成形

1866年、鯉江方寿は陶管(土管)製造の木型を考案²⁾し、これを機に常滑の陶管製造は盛んになっていった。

*1 常滑窯業技術センター 応用技術室

現在では陶管の製造に木型は使われていないが、筒状成形の木型技術を活用しているのが花器の型挽成形である。二つ割りの花器用木型に離型用の粉（シロコ）をまぶし、製管機で押し出した陶管を中にいれ、内面からヘラで調整し、土を木型に沿わせて成形する技法である。成形後はロクロで仕上げ加工を施し、スプレー施釉の後焼成を行う。

実演者：伊藤充延氏（有）たちばな、常滑焼伝統工芸士

2.5 陶彫

ノベルティといえば瀬戸を思い浮かべるが、常滑でも一時期は多量に生産されていた。こうしたノベルティの多くは石膏型を用いて排泥鑄込成形されるが、この石膏型を作るための原型は粘土で作られる。この技術もかつてテラコッタの生産が盛んであった常滑の伝統技法を受け継いでいると言える。今回は原型ではなく、一品制作の人形を完成まで記録した。 実演者：斎藤智夫氏

ヨリコづくり (浴槽)	型押成形 (盆栽鉢)	ロクロ成形 (花器)	型挽成形 (花器)	陶彫 (人形)
				
サラウチ（底成形）	タララをつくる	ロクロ成形	陶管を押し出す	積み上げる
				
ヨリコを巻く	石膏型で成形	挽きあげる	木型に粉をつける	中空で作る
				
ハゴメを巻く	口縁部の成形	馬力キで削る	成形	大まかな形ができる
				
成形完了	額縁の成形	角に土を盛る	脱型	細部を仕上げる
				
窯入れ	焼成後の仕上げ	ローラーで加飾	仕上げ削り	化粧土で加飾
				
完成	完成	完成	スプレーで施釉	焼成して完成
				

写真1 伝統技法の記録

3. デザイン開発

3.1 新商品開発研究会の開催

新商品開発はとこなめ焼協同組合傘下の企業と共同で実施した。地元企業の参加を募って研究会を組織し、デザインに対する意見交換や展示会のための打合せ等計11回開催した(写真2)。



写真2 新商品開発研究会

3.2 ブランドの育成

開発した新商品のイメージの浸透と定着を目的にして、16年度に構築した新しい常滑焼のブランド「常滑なでしこ」「常滑もののふ」の二つのブランドを継続し、育成を図った。

「常滑なでしこ」は和のイメージがあり、素朴で懐古的な可愛らしさをなでしこの花で表現した女性向けブランド、「常滑もののふ」はシックでモダンなテイストを持つブランドであるが、これらのブランドに合った商品開発を実施した。

3.3 試作品

・湯口

大物成形の伝統工芸士と共同製作により、陶製風呂桶と組みあわせて使用する湯口をデザインし試作した。県内の健康施設向けの商品であるため、愛知産の野菜の盛り合わせや、王様・女王様の湯用の宝冠をかたどったデザインとした。石膏型の構造や型押成形の要点について、本年度作成した伝統技法DVDを活用した(写真3)。

・陶製装身具

常滑の伝統素材である朱泥に、伝統技法であるノタ絵により東洋趣味の絵柄を表した(写真4)。

・インテリアアクセサリ

手間要らずに園芸を楽しむ紐給水鉢、飛行機をモチーフにしたミニアクセサリランプ、ノタ絵技法によるふたのもの、手作りで桜の花びらをかたどった桜カップ、なでしこなどの花を題材にした朱泥製タタラ作りによる香



写真3 湯口(野菜・王様・女王様)



写真4 陶製装身具

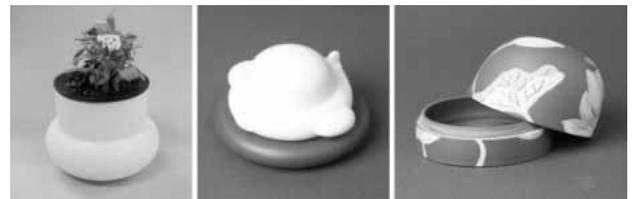


写真5 インテリアアクセサリ

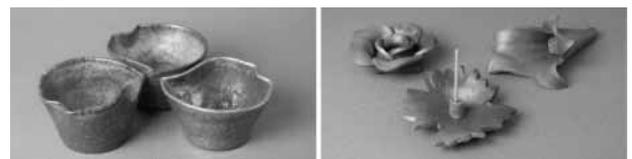


写真6 インテリアアクセサリ



写真7 マグネット

立といった、インテリアアクセサリをデザインし試作した(写真5、6)。

・マグネット

土管や焼酎瓶といった常滑名物、エビフライや味噌煮込みといった名古屋名物、飛行機などを題材に、これらをユーモラスに表現した。成形には鋳込と型押の2種類が考えられたが、常滑焼の特性を強調し、小ロットの商品開発をきめ細かく行う産地の製陶事情を考慮し、型押成形の手法を採用した(写真7)。

陶製装身具以下の試作品は展示発表会に出品したが、シャープな形状でモダンなテイストを持つ紐給水鉢は「常滑もののふ」、その他は「常滑なでしこ」ブランドとし、ブランドシールを付した。

3.4 展示発表会の開催

試作品については一般消費者の反応を探るため、発表展示会を2回開催した。第1回は都市部の消費者の反応



写真8 展示会ポスター

と意見を収集するため、名古屋市内の百貨店で平成18年2月15日から、第2回目は中部国際空港内専門店で3月4日から共に2週間開催した(写真8~10)。

4. 結び

(1)内外陶産地間の競争の激化や需要の低迷を打破するため、常滑に古来より伝わった伝統技法を調査・記録してDVD及びVHSテープの技術資料を作成した。

(2)これらの技術資料を活用し、伝統を新しい視点で捉え直して、湯口や陶製装身具等新商品を研究会組織により開発し、展示発表会を開催した。



写真9 展示発表会(名古屋市内)



写真10 展示発表会(中部国際空港内専門店)

謝辞

本研究にあたり伝統技法の実演をしていただいた前川賢吾氏、片岡貞光氏、中野濤介氏、伊藤充延氏、齋藤智夫氏、記録では青木友子氏に厚く感謝します。

文献

- 1) 水野ほか：愛知県産業技術研究所研究報告，4，96 (2005)
- 2) 赤羽一郎：陶芸の歴史と技法常滑，P155(1983)，技法堂出版